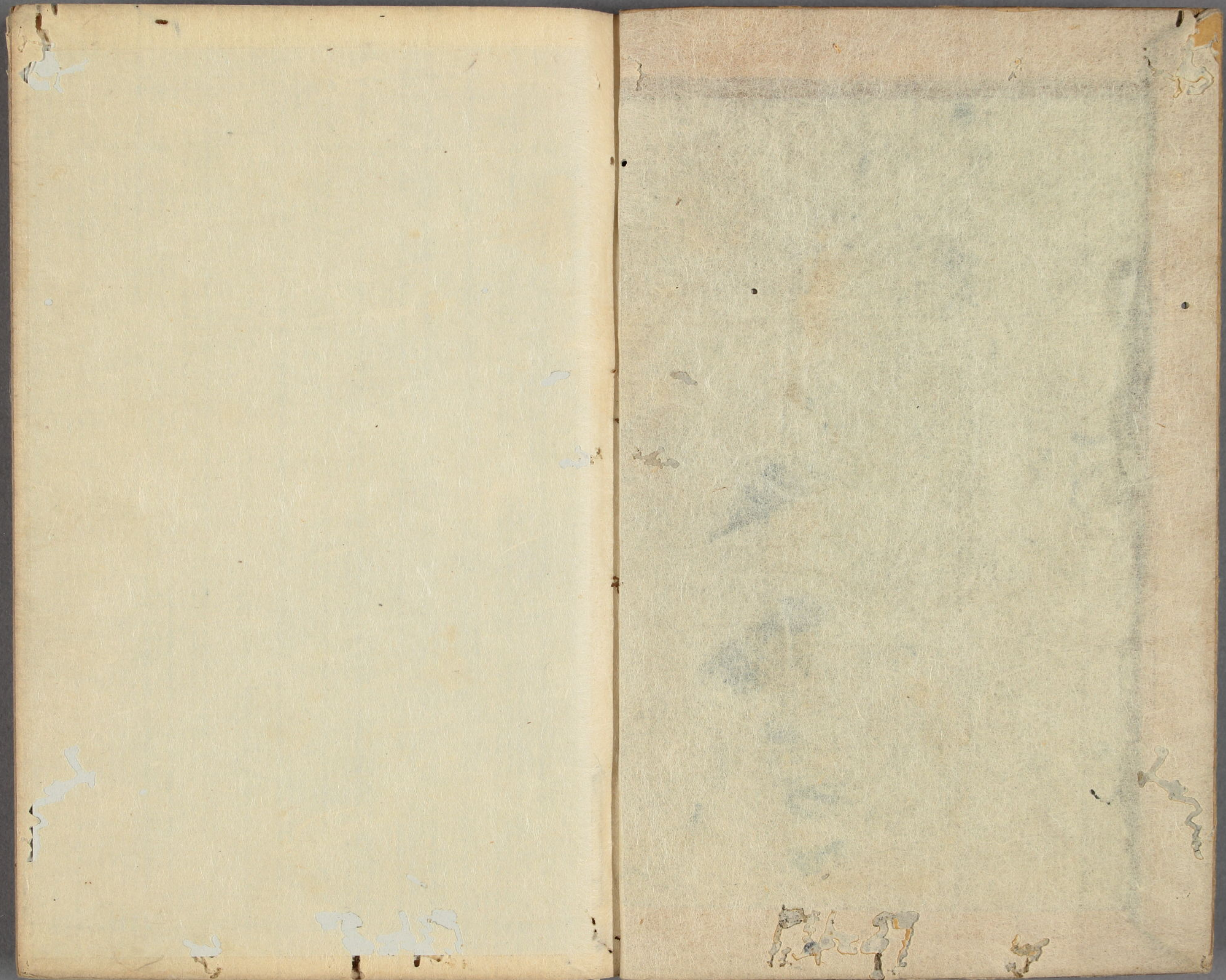


曠野員外

田





曠野

信濃何九撰釋

序文の因いとゆゑのいとすむなる心のり
ありこの形事いふまじとわて
愚考源氏よあふてつゝなる形事いものそけ
ろよのありなるたうの世よあそありのそ自
然よあふハあゆの美言あり
芭蕉決日翁云ま人の長々分りて同一位の
るをよしとれりつるよあふむそまをよしと
れりつるをよしつるよあふむとせりよ
向よりつて上果のりる心のとこのぬ故よ

阿ら一

よりのぬと於一津く浦くを境波濤のり
きり世つひあはれめてるしをえりつるよとて
いくそ集とりよ一けむ我後見の集る我家の能
情の一体の姿一して我心よ應をさるるよ一
ものそは曠世集よ貞室宗因等のりるよの
しきる能情の俚言あり故よ文盲愚昧此
のりく口る事して自己よ能情を知りつると
おりよりのく多く出来情も元俗の今日あ
まはれとるきむあくいととして能の人を種し
むらよのそあふ我家の能情を説むをゆえ
りこのころをさるるよ一しきる事別る事と曲翠よ
情のりるるりよと云く或書よ小翁の曰哉能情の
言ときりるをぞてきあふときい沢を

るしと愚老たよりなく能く崔吉の人たしき下
て能き白きとらこやても能くあるといふめり
甚しくたひり言るり初心として他の白を批判
すりよ又行をたひりしき業のあつてまづ人の力
よよりてあつてつらりもたふらぬ
鑑の白を荊口と許さる見えそこらひ聖坡
の附をいふをたひりぬ歎ひ浪化子ういさうら
孔翁の白を解しそてるいふ歎や秋をたひり
白をいふと思ふの歎ひもあつて考ふ扇引さく
の白をさつらりぬのさつらぬを皆是と人の智
及たさりの恵子よあつてひや上是の業さう
れぬしあつて後世の今もたひりてさうや
是をさつらりぬの吉野山

何ら 二

愚考 依川田喜六の峯の 白雲をいふ
るり此の古今の名吟つらり世の人口よ有
て何れ故よ名吟るりやと問ふ時よ是つら
妙るりるといふて根えをたひりぬ
さつら支考の書りりのよ祖翁をたひりて
る真室の是をさつらよよてるり我又まよき
をいふて白る時をさりの柳下恵の初をたひり
よ似てれんとして彼名不よ支考の格あつて
たひりひ出て歎書りりも軍書りりの初
此支考りいふ是をさつら一白れ愚考りい
しるは支考の初をたひりぬのあつてさうの
山を黄金地りあつてよ金峯山と名づく又金
の帝嶽と云ふ震旦りり花をたひりよ
峯と云ふ山よ隣有林鏡といふと鏡と

列て飛來り獲之ぬ社法見系天皇御製衣
よりのをよくとよく見てよくといいよりのよ
く見よよき人よきみ世心あり人よ此清製よ
りしてほききてるを修くする道志世世よ新し
うりのよくと見むとのみ心うけて尚白り物あり
を世見して花をよと見れよとありよとをよと
土調りか白よ花をよと見して世世ありよとあり
より予の白るる二日ぬよと世世をよとあり
されん世水く白よと世世よと唯大雲のゆよ
のよといよ美系より一のゆよ大雲よ降くよと
てよと只のゆよ回前ことよとありよと記すぬのよ
皆彼清製よよとありよとありよとありよとあり
白れ沃くを世見むとす世と世と世とありよと
花をよくと見むとすれんよりのをよとありよ

の中よと花とよりのをよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
西蔵をよとよとよとよとよとよとよとよと
流石の祖孫をよとよとよとよとよとよとよと
く貞室の腋よとよとよとよとよとよとよと
中しおろりよと西蔵よと人の汝越よとよとよと
きよとよとよとよとよとよとよとよとよと

物よりそ花見り人の 世 刀
補花曰道元禪師の款よとみねとよとよと
袈裟袋猫の皮花のさりりよと大左刀の鞘
その下の白をよとよとよとよと
峯の雲よとよとよとよとよとよと
古連日堀川百首よと色よりよと穢の雲やま
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

下しの中ののちといふ事の花の客

敬母曰左傳曰師一宿為舍再宿為信過信為
次危を信一一夜泊るを上の客二夜泊るを
中の客三夜泊るを下に客とす下しの中の
と阿婆ハ花の七日を泊りて心の子を惜むと
見上しつ棒よ減ぬ花 此 滝
堯子曰すくよ於越一き客の言一山わけ
はり電も棒ありり古歌云ぬら一

らり 花を酒 盗 人よし

愚考万葉よとる花をよめゆけとありと
らの并ての後まらりあともよしその益よ
るよ花の歌のらりゆくよ益をよめゆけと
よれ酒盗人よとる心あり一
ありありや初花よりの物忘れ

愚考るるありあふを信よゆきるるといふ偷安
と書しや

檀の本の花よるるいぬすく

愚考檀の本を曠世集の撰者あつ堂号
をりるる尾陽檀木堂主人と序よ書
るるいぬすく

目よるる茶よ山時を 初 録

愚考孟子曰口之於味也目之於色也耳之
於声也鼻之於臭也又劉撰万葉よ綿
曠野策師行目見山花耳聽草歌よ五月
山卯花月夜時をきけよあり又あり心
よるる白よ堂の三辰切の白ありる
る世の人よありぬ

云声不と初のゆーや 社字

雨柳曰源三位於改一声をさゆりふらして時を雲
跡らりりふきをさるりゆく

杜鰲 十日とさき 夜 舟 多

舟鹿曰壬生忠見い流りいふ時をゆくらむ郭公
流のゆりあすい夜涼きに流る時をれま
物るまよとるの

阿ふ形一や今起て雪をく起す

愚考 金葉集さよふけて床さあまりのををか
と手す人ほそふさそきく産りのをれ

峠まろく双抱つて月見 阿ふ

愚考 定家卿いさくらを流るぬのありて関
す志心さくはう一そ月の入寄の傳りも叶ひ
るむや浪化解へ云は秋をいさくらを雷をふ
たふらふふさくさく白れ注ふ引て阿るを流

阿ら 五

るらつ一既入祖翁の自画賛くも表は云ふ
木履うけしめて云々一とさるりふらゆりての流る
りして考ふ会す一

名月や 年よ十二を有るる

古連曰八月十五日と数す紀納言十二旦中安勝
於此又之ぬの意一や又続古今集天曆序製月
さくさく名月を連と今月のまよひの月よ似る月
を形す

名月や 海の中りたる人 阿ふ

漁村曰初花集一秋の夜の月よ心のあくられて
雲をふ物を思ふ改ふあのを秋の流る似る
秋くつて夜はらぬふと見え月夜が

愚考 十三夜を中右記云保延元年九月十
三日今雷雲澤明之覽乎法皇明每及之

秋の香遠にふあひるうら

香原堂曰は法所あし貝といふもの形に於
てよりして連秋の貝といふあはれとを
心からたゞしとて或人よひひとて
以て我意を松浦の磯のより貝の尻を
斤たひひして 愚考魚肉曰膏菜蔬曰蕪
廣身曰凡非穀而食物謂之蕪

のさりのあはれなるうら 柏の歌

愚考史記曰松柏為百木長守門固物を
松といふしめて度年の膏よりりて
柏をさすよふ矣といひて流危する人
といふ意なり 莊子曰受於命天惟松柏
独也生冬復華又王荊公字茂曰松
柏為群木長故松後公猶公也柏後白猶

伯也五雜俎曰松柏独以春抽新葉既長而後
葉黃焉又曰秦皇封松於太夫又曰漢武帝
封柏於天將軍又唐武后封柏於太夫

え乾や物とるうらまはと 進 楓

香原堂曰或物流しよ云海のうらまはの名残を
しきよりり 初まをさうらまはのうらまはを楓の
後進楓をさすは心休とて 愚考山家
集のうらまはくまよふ形とて字目より心よりり
みりりの山まよふるの楓の枝を物とて
花のまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
花のまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
く楓の待りてたひひとてえ胡の歌の字眼と
つてははらまはとるうらまはのま

愚考白氏文集曰忽因時良警年幾四十

ぬ今^{ハナリ}欠一年^{ハナリ}以一海を二海と云形して与と
まをり

伊勢浦や比良引結むと云此妻

味堂曰太祚^{ハナリ}交以造管の材木紀列然堂より智記

小棋子粟やひろくむ松の門

愚考続日本紀曰聖武天皇神龜二年播

磨直漢七より棋子の様を以て伊勢お渡

よ石の上より一里より水をせうかきし

りの大せうして此初を摘む

月苑のよりぬる琵琶の本より小

一書よ月苑の娘と云年ぬ月ぬ娘目れ始を

ゆ流しと云こ此琵琶の本を云はゆりよてハ

月形を取とりよゆゆりはてハ法ハ四季よ表す

さか娘やよいの面いり形くらむ

一書よふいの面を能の面より瘦ゆりをもり面こ

之并寺拍誘るるよけりここ面よさを娘のれ

りてのいりあむとりよるこ一書よふい孫

依帝天見等の名有りて依面こ

初妻の目出な名有り^{ハナリ}魚こ

愚考^{ハナリ}鯉魚こカッホト、カッホト、よや鯉ハ北

条五代記云鯉館を毎年交よ至て西海より

東海一より伊豆お換安房の浦よ約より

件の鯉を勝負よの法をよとてとやハ

岩よ交度ハ法侍戰場門出の酒肴よとて鯉

を考と利ひこ

初妻や漢名の橋の今れさあ

一書よ^{ハナリ}菘よるら菘夜菘とて東海の漢名の

橋よりりりりり愚考^{ハナリ}文慶八年漢名れ

九月一日して声あり 建仁二年十月十五日
の朔誕生す時入雷傳明奉の冬雷を見て
何といふのそと仰入雷と云りのことと云ふは我
生達し時入雷ありといふ傳教大師といひ聖一
圓師といひ誕生の時の盛物の危と雷の白
きを説くると名師の叡智を甘歎して我ハ
え日の生達して松竹の門徒を始美服を饒
多の衣上目るれとも少くも免未るのきこふ能く
思味しこと已う身を省るれ免るると知る一
我等式々宿ふもあやげさのま
莞尔曰るそくろく言きいやりしき朽くろくして
まをふりつるやすくろくろく人師是は我のまも
ろくろく一くや
暫居ておしりく梅のま

愚考拾遺集家伝とよあすの花おつきよ
梅くろくも唐を居てろくろく夜居る成刻より
寅やして朔居といひる寅刻より刻をこと云
梅の本よ花やくろく本や梅のま
一書入神傳鼓弘氏細代民神と号す
愚考野菟の秋より山一伝述形きく山の松よ
をくろく松中より本の枝より守くは古秋よりま
るり一寄本を外の本の生すり之息とろく息
息女の号より実の子をり人生所以泣何本一
幹面分得氣異息故泣重離母義也故子息
息女といふ
よ云 雨を伊勢の垂一うはよふ
江味堂曰る一を伊勢れ人松田自當之育人
りして能器よ忘はく白をすり毎よ紙よりよ

書きて竹の筒に入れて墨一筋り、を紙よりのを夾
おのほりしよるらふら白こと云く

集の尻尾にやけつら 白尾 一筋

愚考 白尾の鷹とるは流尾の鷹之知将國司
廣澤大納言政教卿鷹飼の名匠と頼の君志
らくとりよ白尾を流尾して善遊鷹狩一とら
よりのそらしよる流尾の白きをえて雪多るとた
りひいていさよとよく舞揚すく云く彼政教の女子
を祢津貞重よ嫁す時よ智引身とくして鷹
飼の秘書悉く附属す流尾を流の蒼蒼とて
せよ志り人於しとらや此時後冷泉院の朝妻より
文化よ多りよして九八百海よ及よ時古志因家
の臣下よ成祢津祢乎とりよ又日本紀曰仁徳
天皇四十三年秋九月甲子朔依綱也金阿部古

捕吳多献於天皇召酒君示多曰何多美酒
君對言此多敷多在百瀬得訓而能後人亦
捷能之掠法多百瀬信号此多曰俱知乃授
酒君令養訓未幾時而得訓酒君則以尊
着を足以小鈴着を尾君殿上献於天皇是
日幸百長世控職云く鷹よ六十の病向い餅よ
十六品の梅方有流美よ三ひの分ら向い不謂
酒流流字於交流祢津流之鷹多を多てむつ
うしきこりりの向いと中定家卿鷹百首等よ
て知り一

葉亭の主人沈み我考をせせ

らましくる筆意の向い故あり

沈み我考らましくるまきおし柳陰

愚考葉亭の主人を王義之の晋人字流

少右將軍よいり永和九年三月三日十三日
今此書山伝の蘭亭よ今寸晋書列傳を贈
文して云文を善し一隸書を善し一又草書
よ妙を善し一れと草書と一呼よ體勢を善し
今此書よ孤張すの亮統阿の一我を善し一
鳴を善し一實むるを善し一いり一ゆり一
親友を善し一我を善し一我を善し一
て意してりてを善し一我を善し一
うつらり又山陰よ一及士阿り好我を善し一
我を善し一我を善し一我を善し一
嘗て善し一我を善し一我を善し一
寫して善し一我を善し一我を善し一
りて樂し一我を善し一我を善し一

池よ勝舟書を善し一池水慈悲一人を
て善し一我を善し一我を善し一
よ善し一我を善し一我を善し一
我細る善し一我を善し一我を善し一
よ善し一我を善し一我を善し一
よ善し一我を善し一我を善し一
と云く又河海抄よ曰今の世の銀名を以て
て仍り山伝の伝を善し一我を善し一
の如く之日本紀を善し一我を善し一
と善し一我を善し一我を善し一
よ善し一我を善し一我を善し一
命を善し一我を善し一我を善し一
京の一よ善し一我を善し一我を善し一

うみの文字よりを破り本字の内より割きて
ををぬりてと

いそのき 聖殿治んをわら ち柳子
在味堂曰叔夜柳花終日艷

はくしー 既中よまきり一りあり
愚考古く有をりて改を包むて中とするす
後世方るるを改中と云圓るりのを帽子と云

其ゆよらうらうらうらうらまき花らま
既亦曰六百番歌合伝定朝にまほきく松の露
の十ゆよ吹まてのあり夕雲雀らま

手を突て歌やより 蛙の形

一書よ女院の御車の前よその吟るりたま此
集の撰志 悔りを省て新書をのをきこり
も志くは一白まよるも字え情のるるまき蛙

の歌より例をよむハ前出るててて花山
なるしと山吹らりり 滝の 巻

一書よ西海^{ニカワ}よそとま書たり新古今を花川
岩の山吹まよるの横やらりらるめり

ま堂云この川の花のまーてるらめりまの
うらのゆまところよ愚先おりらく新古今の
歌らるし書るりの山吹らりり滝のまところい

物まハ巻法如尚の花のまーてるらまをえま
ま又巻ぬ家集を花川ま守彼まけらるまハ
ららままま山吹の花

今有いといらぬらりりの燕らま

愚考杜詩よ日入故園嘗識主ぬ今社日を著人
山まゆま花咲らぬらはくしーう歌

愚考山まゆま野蠶と書るりの漢光武帝の時

を五六のうしろく魚一一人の精匠を五将也
七将也きふとつらつわ歌云塵抄よ位江の岸の松
の根うちきく一とよありを松の根を折洗ふぬく
るのりとききこえん水岸よ捌く精繩の敷しを洗ふ
ぬくよ見えゆりてさく一捌くるとる後ねらるら
むさく白の意を杜律曰五日に深草園を看弄
魚舟移白日うらふ借りぬりぬ一

魚舟移白日うらふ借りぬりぬ一
愚者考たのしむる見の肉よやうて精のにより魚を
をりて舟よ舟折あげのさかたをえんぬく面をさく
るさくやうをさくさくさくさくをえりよせと一いげ
りのいほきつる命の勝りさくさくさくと精のぬりさ
く魚のうらり一きんを舟よねまのし一も仁徳に
りぬりぬ一智度師曰一切室中余を舟一法罪中

殺生罪為第一或書ふ古文杖風の辞を
引て歡樂極兮哀傷多とけり浮世のさか
の愈ふぢりてを叙しぬと云く 愚老に
りつらくは白を貞室の白を程りて後り
よりう本体る事ハ聊免れぬ

松子や 菘 菘 書人を見らむ
一書ふ火桶よ松子此花を画くるる後
水庵院の御製とく又東菘の院の御製とく
り一 愚者考松子紙よ云書たしくすりり
松子横山吹さきこえん松子の恨むとけり云使
のえぬやうぬりてをりぬりぬ一
すいづきすこきよまの炭 俵

風谷曰云名抄曰火たこえぬまのすい花の心地
して人とすこめぬすこまののちやとよぬ

よ千二の女子の是を字て冬のはすむつふ
そ火のぬききこる今がしすきまのしきまと
籠しきり又漢少納言さすきさきさきさの
なひすむつまを一番して炭俵のあつ
ららしきさをりて一白の主とまきるまらり

夕歌や林をいろしの瓢

は白を林とし心ゆりりの風國林あ暮太康工
既よ白歌集評林句解金花傳袖日記未
よ出守さ心好遠すの根えとしゆまき古歌を
るつりゆ一あり古歌り林歌る遠ハは白を林
と思ひしあつむまを只おふよそよ見えて白
のまのよ抱らん一途よれりいはてしと見ゆ
そ曠野の眼あまの初よありを藤おとや
いとむ又金花傳よ曰やふの白法かしの智

有ゆ飛のるよ傳授とりよるありやうしを
古よの信しむる事ハ皆爰よあつやん既よ
古今抄よ曰夕歌や林をとるを切て讀し
夕歌の花と瓢の實とのま林の若別しめて
る信ま瓢のをりくやうしき花の夕歌も
あつ瓢よるりあつやとほやうしきあのやと
あつしと云ふ 愚考みりり形りむらつ子
とそままをえし林をいろしの花よそあり
るり夕歌よあつあつし汁てまありのみ又及程
るり夕歌を只しりよみりりるり子の今え
まハいろしの花をさくと過去も現在も皆
治定と夕歌やのやういふいとまゆえあつ
過去よ見えてあついものをさうしりよみ
夕歌を精して夕歌や只しりよみ白しと

貞観年中始て僧位を定むと云て

新教をさき子よりなりたる人の

愚考新教の毒を人の志り而て毒を牛子と
りて乳殺りの一毒の油を殺し毒をのり

きより皆ふりのりやや毒の音

愚考新教集ふ毒をけしるるの枯葉のそよこ
しといふ言を信いしはち敬らむは古教をりて
けしるるを自擲るなり

あの毒を毒書をさすの便くぬ

愚考新法今集りしものむるしきそら
うきしきるる方を志り雨のそよりのるる
を擲つたふ換書しりて

ひよのらしと新書なりや女布花

一書も続古今集に何事かを志りしもの思のそ
るふしはれひ志かきそて新けりるるむ

字かうししむらぬもあへん新書

愚考仕口上人を伏見西宮の住持とす
の二書よりみて毎日の志の字よはして
そのまゝなるなりたひの志なるり廣大なる
くぬもあへりあしとりし意なるなり

宗祇法師の志と書ふよありて

名もあへぬ小字新書

愚考連教玉要抄よ名もあへぬ小字新書
意りかたをありて目よりしるるの志
うらむと無しし白こ全体も新書の白を
とるんえしりあをを白紙とて一紙
るくさしりしむらるるを白紙とて
流傳の思いしあををいしむらるる

のるりささまたあそあさりーめ信書有て
し書うろそねて白塗人の罪途まは

枯枝よ鳥のとよりりたり 杖の音

一書よはるるる季吟芭蕉亭堂一派新流の
筆は信口傳の一書よ夫本集きりくすねらうとや
をんまめてより我文のえこれおそるべき
花よ華の葉枯らりて人るそ出の貌おも
あつて

おまよりのまあのをー一たり酒の間

愚考酒を煖るよまき温の間をりてよりとす
ふゆ一問と云晋朝雜記南史よよ出たり炭炭
有昔羊琇といふ去炭の形よ炭を焼て木人
形よ酒瓶をりー一せ客の手りりり時を彼
炭炭よて人形をりて酒をぬてめせて

寒よあつたりるりとまて又林間煖酒焼る葉
名有りもあつたり又羊竈物後よ曰言倉院に
柴を煖覚しーまらむとまさをあよん或夜燈を
よ吹らりてまきハ後まの供のみゆつこ乾きよ
めすとして意く掃すてりり枝よりりちり
木の葉よを穂屋の隙よて酒あつてめりとして
菊りつよそまきりりれまをまひの露入
忍入てありちりよ主上舞よ天氣は快きよ
亦笑せあひて酒を煖るよみまふを焼といふ
竹の心をハそまらりりまをりー一らそ
やましーらまをりりらと却て歡感よあつり
りちりとしてまきハ上一人よりり茶を飲り
やうて煙籠るをりーまの形りすや
蓮の葉のぬげりりり蓮の葉り

あぐさむら人のいぢあきまありけり〜終らんとやと
おろひし

木うら〜二日の月の吹ちる

去来抄曰二日の月とらひ吹ちると飾き〜
つとらう〜すなれり先師曰あやうるる二日の
月とりよりの〜はちり〜名目をのそげん
さちらうら

木の紅葉焼けり〜きおろり

穀女云司る温公侍後曰魏野之詩も焼葉灯
中無宿火讀書窓下有残灯

木うら〜吹とらま〜夜の中

愚考の考の中を紙もて志をらひて隼の
吹を〜するり疾気とげし〜夜の中を
〜見事ハん中らゆ〜中を冠らとて

融白之五雜俎曰隼之撃物遇懐胎者輒
散不殺蓋其仁也

善鴻や羽白黒野赤り〜

空際堂云去依日記曰黒漆の松糸を踏て
形ふと〜雨の名を黒く松の色を〜微れ
流る雪のぬく具の色をす〜似て五色
よ今一色是らぬ

火と不〜て幾日〜成ぬ 冬 換

秋亭曰初て花の蒼みて抄よりか〜赤みの
色くを火と不す〜中〜様を〜く
蒼り〜とら

冬 蒼又より 換

一書よ樂天閑斎紙曰閑斎而復倚此住又源氏
末末柱の巻よ〜

本はしらすとむはたさきゆりりと申ふ

いとげるや居獲るあ初り人次才

愚考いとげるやを初イトケ十ニ曲礼曰人生十年
曰初又本草小品方曰居獲此華陀之方也元日飲之
辟疫癘一切不正之氣造法用白朮桂心七厘五分
防風一两菝葜五厘烏从二厘五分蜀椒枯枝大
黄五厘七分宛赤小豆十四枚右三角之以繒袋
盛之除夜懸井底元且取出並酒中奠數沸
家拳東向後少至長次第飲之兼淨還投井
中歲飲此水一世无病と云

年毎ふる治の故の 養 の 部

愚考美日季より清和天皇貞觀元年十一月
九日詔て初とる二月申の月と美日大御神を
杯徳天皇杯護景雲二年正月九日和列三皇

山と岳跡之同年十一月九日詔と云又曰
美日と五岳家の祖神あり神詠よ曰
らくの南の岩よ家歌して今もさうえむ水の故
浪詞花集よ美日山水の波浪咲しよりさうゆ下
とまうひてありのり又さう治の出入るせ花の
まうりして入時を四出の時をふよりまうしと云
爾雅曰鷄棲於干為櫟鑿垣而棲為埘又曰鷄
棲於桀去うまハ鷄棲の号ありを花表ると
書る大外謬ありとらや鷄棲をまま本と費本
との間ふ棲を名とらり略してま治と書る
まうり華表ハ誹情之本造り方格別之
書るままのりくまうす 櫟の部

愚考伊勢石清水と二所の宗廟之欽明天皇
三十一年冬恭園宇佐郡よ法度と後清和

袖をひらう一うて一欸よと女子ををと
めさひすまらぬ方をとて女さひすまら
うらうら方を公事根元曰舞姫を五人とて
此てよををを幾度とてうらうてをらりと
あひり定法之ををををらりとあひり
度指をををををとりて見え連ハ元日あり
自る踏歌端年を明と教合五度ありと爰て
治定く一連ハたりとをあひり古往今来
ゆつゝ一きしてよんよて申し凡幾の及よ一き
よあひり能くわりの味りよて感得す一或書よ
曰雄略天皇二十二年外玄日過まよ符形孝の
付天人降て祇樂を奏す此例よありといく
あの一きいよや

追まてや眼よはりのあゝ鬼の面

愚考延喜式曰方相といふもの面よ口目を
付て鬼中らひ一あり姫の極の号芦花矣
を執て宮城の四門よ儼よと云て続日本紀よ
曰文武天皇三年始て去牛を依り儼よ
て疫疾を拂よと云て此夜豆を亦りて後漢礼
儀志曰養分之夜散小豆又名物六帖云教坊記
曰大面出北祿蒙陵王去恭性膽勇而貌如婦
人自嫌不足以威敵乃刻木為緞面陈陈其之
此詩歌十六句各歌よてゆららるる事ハ編よ及以
禪岡の撰ひのこしあひくよ守りて
愚考禪岡を一系禪岡良公後花園院後
大御門院西代の関白之関白の父を大岡といふ
大岡判發して禪岡と自称す
新嘉のきこらうあゝ心はくまうあ

蘇氏曰子不うを承るり玉簪草と書全傳
擬室珠の養字有り葱の花を子不うと云
糊賣を養の養の花のちいさく流ひしうとき
不うよ又云しるるこ流ひしうとき
るり俗よ九十九髪と云

五美人

らげらよの抱つけえ我夜に那

愚考李夫人を前漢外戚傳曰李延年姝
るり漢武帝在宮中又曰婦女小五等あり
后夫人孺子婦人妻是るり漢書曰上思
夫人不已方士少翁言能致其神迺夜張
燈燭設帷帳陳酒食而令上居他帳遙望
見之乃對夫人之姿ありしと阿らるる
帝傳を依りて曰是邪非邪立乃定之偏

何姍々其來遲又夫本集よ李夫人よ歌す
雅有歌あき人あきつる櫻ももよよあ一
いあははらさそおれり言わりんぬ

長吟よ帯ゆのみをり産氣うふ

愚考揚貴妃を弘農の揚貴瑤の女あり唐
玄宗めして妃とす貴妃を女友の位あり
て后よはく相國よ比すと云く夫本集よ
言を揚貴妃よ歌す弘農の揚貴ゆよを并をり
めの花の色むりの人此面影そすの
りの數あやむりの妻の候を云

愚考昭陽人を十六策ありて漢室よ入生
涯帝のいはく一みもるり一と云く夫
本集昭陽人よ歌すの歌言をの親はるり
るりや心おしき床よ明らきてと云く此

六十年のそふふり

花はうらぐ 極りへらるや 牡丹り那

愚考西施を會稽の人物をいさく後
の娘なり越王句踐の宮女なり 一を
范蠡諱て吳王よにわらわの白雲の
百川を海曰西施を牡丹芍薬は比す王隣り
詩芍薬法來功已成毫 着終日麤殘生吳
王美在應多恨 写醉西子不負情是ハ
芍薬を牡丹より改めし子細を芍
薬を植う一連ハ一二年を花さる女
牡丹は極り一連ハ一二年を花さる
るなり是則西子より此すりなり
此西施を夫木集一 陵園高の歌るを
西施と入習するは 沢多陵園高といふ

天子遊河内りて陵墓よ入是宮女遊の号
ありて甚忌しきりのる連ハ美人と詠
詠する之夫木集陵墓高より歌すり歌二首
其の熱杖の慧のほりりはく三代よも今
をわたりよらりか松の戸をとらて
まゝその日よりわらり夜もあきまの
りひうお三玉集月よあといふ見え
の門いてやとれりて消えてぬえを又白氏
文集よ松門曉倒月徘徊栢城受日風蕭瑟
詩歌ともよその意はらり 隨煬帝と
考ら陵墓の高をいふと云々

よの本よもよきよきよの持りか

愚考漢帝卓于小玉昭君をわらり昭君ハ三
千第一の美女なり画工の禍よよして止る

をばさきとていふなり云々第一の女なり故よよ
の本よもあきしれぬと白依せり夫本集王嬙
君よ歌すの室家けうは守とてあけり阿らしと
そのみけりしひのけのまのけりきりぬ又五
雅頌曰西子失才吳宮王嬙燕絶異城昭
陽終為禍水豈國兄弟身尺組絶命不ぬ
ま者不可勝数矣此五人の美人を出一
をりあきも夫本集よるなりよとていふ
を原知有つし初まてよやていひやし海の
序よ何故よは名ありといひるをきくと
阿らしひりあてりといひたりと族も阿らし勝
次第よすし

七夕よりのくすりもあきむり

愚考 七夕を公事根元曰孝徳天皇天平

勝宝七年始めて初りてと云く又爾雅曰折木
謂之津在箕斗之間則天河也劉炫曰
天河在箕斗二王之間唯南子曰烏鵲
填河成橋度織女也俗語曰織女七夕當
度河使烏鵲橋集林大斗記曰天河之西在
星煌く与参俱出謂之牽牛天河之东有
星微く在氏之个謂之織女

時考 時をきりしなり

愚考 後唐に多万里小路正二位中納言
帝よ凍表を献りて以身ひるきりるをえ
陽りて世を逐れ多いて初来とて大平
記よるなりしなり廿九年三十九中古の賢人
本朝の忠臣とて今り建武二年三月出
家跡心志の二祖宗綱と号し迹倫隱王

と号すさきハあそつちををりしうり
うはくく人よんらうり 荆々
愚考呼息を親應二年六月謀叛して武庫
川をよれりて謀をく一族悉滅た

いろしめくこらをりや月北 雲

愚考一休禅師を後小松院の爲胤名ハ宗純
紫野大徳寺よ狂雲集曰前年辱賜大燈
圓師頂相予今更衣入浄土宗故茲奉還栖
雲和上離却禪門最上乘更衣浄土宗僧妄
成め意靈山衆嘆息多年晦大燈又賢法然
上人遺誓曰法然傳圓活め来安坐蓮華上
品臺教智者如尼入道一投 起 請最奇哉又
一休を狂雲子と号す禅師從來の禪を捨
てりて浄土の三昧よんらうりさきハいろしめ

をちとる家言くの衣侍を上よ依り方
りの有り月の雲を狂雲此雲の字よよ
あつらるる

号すおしはくろひのるき、驚ふ

愚考法然上人を美依の人名ハ源空
天台より出て義安五年四十三歳よ浄土
宗を興す一向専念よりて建曆二年正月
廿五日東山言水よれりて迂化号すの伝
くろひのるきとる意仏三昧のり極こ

ハ字 雲 興あてんら竜田

愚考款よえりしをん禁斗よ嘆をめて
花を興あつて山は此を禁イり
をよんらくハ字よんらくよよ本の身
のわらわらひくをのらわらく

の交りし惠を法師より魚肉をばきつ付
しるるれ情のやと云く

貞享戊辰の年弥生朔日

東照宮の別當僧正の庄房小

慈惠大師 辻倉執事 法華

八講の坊より一寺きりるる是ハ

融雪ののちのりて序界のあらるを

散花の間よむいりしはるしり

愚考 東照宮に別當なる東叡山内寒松院と云
慈惠大師の元三大師のりて天台庵主融
院の良源と云ふ自分鏡をとくり教を写して
曰我像をを慈ふもを邪魅ををせけむと云
今東叡山よりの所の像を才子草紙に
写しと云くは戸秘子もを民衆法眼の蒙

りのと云く寛和二年 正月三日 入滅と云く
法華八講を僧八人ありて一日二卷宛 講すりて
しこのや石淵寺に勅撰延暦十五年 友榮始
の母の冥被し終きりしこの端ありと云く
八講とりし所をか賀ふよりの出寸を法華
八講なりし時よ僧徒よ施す料ありしこのや法
華第一序品よ曰天雨曼陀羅等摩訶曼
陀羅華曼珠沙華 摩訶曼珠沙華散
佛上及法大衆

不ろしと云く 因や多しれ玉

愚考 龍女成佛の事しるる法華經提婆
達多亦よ曰いっむそ女才速よ佛よ成るり
を好むやと付し龍女一ツの宝珠有價也
三子大千世界之以て佛よ多し侍則之を

入て見ると形を花よみ美ふを形を説
田と心の對るなり

白魚の骨や武部り大江山

愚考武部後一條院のあり如泉或部
の娘なり長えの以歌人の数よ入大江山の
歌る則序の名歌よりして緋白魚の骨
の繋りぬしといふ心なり

唐崎の松を花より腫りて

一書小此白不白身三又平白此身を入する
他譯を後人の意なり舞を角よ中よさき
よりさき波や美燈の入によ弱止て比良
の言根の花を是より言よりなり
あつたりとるなり是より花よりなり松の腫る
面白くむと未決定の中の変定のを

るりかふ無ふ 一書小花を尚季を述と
急るき松れりる事ハ彼を煮て松を
祝すり美るなり古今抄 去来抄より
も角去来この角皆 既屈之我を只花よ
と松り腫りて面白りしとこ 一書小唐
崎の松様より腫りてとをん 第三体なり
唐崎の花を美れ夜見流してとをん
予白りりいと云て

藁 一把りりて花見り阿波色か

愚考阿波色のを森阿波色の浦尾張るなり
甚俊朝長阿つら我を伊勢の淡萩折交
て妹恋くらふ見えはる月うれ伊勢の淡萩
を煮て月見えを角のさるるなり藁煮て
花見えるを 俗語あり月と花との心對

あつて奪胎換骨の法あり

電燈の鬼獄さきき 詠せり

愚考琵琶橋を名古堂より津湾への往還
あり長六十回余鬼獄を美談あり

関ふえて爰も爰もあきさき

愚考丈夫集より美談の曲不破の中山電
頭てとほり水の関は菟川爰もその吟あり
一々紫菀白の之坂を六曲と白妙の我衣
自らぬき連りありとも爰もあきさきの名不
あり宗祇法師を連歌の中興之記列
の人和歌を一條禪因より受け東野列より
古今傳授有集外三十六歌仙の一人之
文無二年お列湯本より寂す年八十二
去聖出て布子養を〜更衣

愚考旅中の更衣より賣つりあること
花より事ごとくあり布子なることハ賣惜〜と有り
古今集より橋色より夜を涼く涼て思ふ
花のちりりある後よりこみよ解よ去聖
のりりあることハ

五月雨よりうらぬぬりのやせこの橋

一書よりさ角曰此橋の名大なりと名不りよ
ひて矢矧の橋とあり一きりや去聖の
の天よりあり賢田一橋よりぬりへり
〜よりあり〜京大津よりあり
水よりありあり五月雨とあり
よらりりりて水接天と見えぬ
あり〜此一橋を見えぬ時とあり
ひ一りよあり〜京大のうらこり

て及一きや又孝のおよ阿修くくんとりり
誓老の教なりへへ

牛も形くき母のあり此六月毎

一書り万葉山嶽の強田の里ふるまを阿修
君を祀りへいりちよりそゆく此秋本幡を
田るこも乃筋をまといるを勿論牛の有り
といふなりへへ

みよへい誓老いふ秋立 貝れき

愚考貝る千手経曰若一切之众生法天善神呼
ハ當み手自法螺すへへ 器録曰螺の物をりり令
命を下し一事を觸ま交を告報ふ合をて此の
言を以らうふ寸勿論生貝を用少資を付物
記曰大日如来南天鉄塔吹大法螺為说法以此法螺
授釈迦釈迦牟尼仏示給樹菩薩中曩祖形

去後箕面備入給樹菩薩淨土奉値 過菩
薩傳受先身之時今猶有大峯吹法螺
者驚危生無以眠方軌也自同自善して
云去後貝み貝の音をてあふ心秋立と
いふ音のきこむ所を在 聖み行りりその
白くもあふんあふへへ心只此白を
居るりり推えりりきり白る事ハ秋
立るまをいりりあふへへ 爰み後老の
類白といふを薩と貝との間を眠み見
えりりりりりて受ふ凡 意をりて見え
えりりりり心も薩と貝のうはりといふ
六月より七月よりは事つりあふ火慰金之
故み後老の式ありりり人知りあふり
去りり申古よりのありりりり近秋

武平のころ六月十二月の晦に汝あり全書
曰金峯山を例の自震且飛来の時一不
能来の鐘有則六月朔日之故よ六月の吳
名よ後ひて林鐘と号す是時日本にい
やりに鐘あり人甚きを奇と守五経通
義曰鐘者秋分之音也此山ありて鐘
の音より峯入の貝の音ありはり故よ
いふ林と名とるは後をりみり一のを
その字よそも怪りへ一のをそひりのを
おもとりのてよををえり

夕月や杖入水好みの角田川

愚考淮南子曰澁水水音小澁水水音
大と云く杜詩曰挑竹杖之引云杖兮杖兮
爾之性也甚西直慎勿見水湧躍乎變化

為給矣又金将石试水将杖试銀将毛
试と云く八角田川を平均りて海よ近く
水の流達を水はれハ澁音澁音をえり殊
よ夕月のひるまは目して見たりこく杖
をもちてのまはりしを音ありりて澁澁を
試ふとりよりこ

唐古よ晏士何ふそよの月も見よ

愚考三国一の名り何事ハあそ十三夜も本
朝のりのるまはと我朝自負の一名に晏士山
を士を晏とむとりよの号るまは神を女体
ありと云く

雷の晏士葉家一のよふれり

一書よ晏好歌よそまひやれり晏士の振
んてのきいたの晏よ出てるまはの古歌えり

古盤山も唯大雷のゆふし

愚考前より出さし古盤山のゆふし系色
も大雷も降るゆふしをてそ外山の並りて
見ふ形くと形わ

夜はれ日や不彼の小家の煤拂

愚考夜々の日とる夜を日よ次といふ
るりの孟子曰仰而思之夜以終日晋書曰車
胤練囊ふ數十の螢火を入以照書す以夜
終日不彼の小家とる不彼のを根りの月
を居るるら旅りをきとすり此不と夜ふ十
三日の月ありふよはしき小家のるる是
を雷のるよとらしと煤拂ふといふ系色
ふへしと連ハ不彼の介ふうこりぬははよ
さるとるるしはよとる不彼のを此れと

いと白川のちと龍田よを振まるとん大十
るるりしと下もよいりて理屈法形とむも又
うまうとくくむ不彼因るを武を皇白鳳二
始て流列よをらると云こ

雲雀より上よ休らふ 詩うふ

一書よ何系明の詩よ際坂盤雲上秦城
向斗着此のる雲雀より空よ休らふといふ
る形わと云こ

花の信 誰ふ似る旅兼うふ

一書に忠度はのゆきふれてまの若いけを
宿とせん花やまよひのありし形うまの付こ

郭公形みしたとて笑ひさわ

此考曰不とくすす多先を不若のきる是ハ
泪もあめりむし

文級の月を二人よ見ら連たり
一書よ祖翁の焼一人泣とりよ二人よ見ら
あつとを依らまてり

狩野桶よ鹿をぬはげよ杖の山

号を言曰一説よ狩場よてまよ桶ありとすら
非るり一し狩野桶と号よ法眼之信
末曰布次布といひし時甚多し一して衆多
料よ充むとちまき桶よ花をす花の敷
を画てひさのをまると云てやましし持信よ人
何りまよ餅まきして鹿をぬはげよとるり

澤彦の墓をわら連れ杖の号

愚考は彦和尚但字の人名宗彭大徳也
住穢尔川東海也実基正保二年九月寂
墓印時一箇石耳

学権大もまろりり夜りの声

愚考は彦彦悲冷野干悲雨窠よ花の
まよをろり心故よ大も我花り亦よ
水の何ろりをのり一ひて考をまろり
やとるり

いく為紫そ連不と袖を不ころひす

一書よ夜のまてま不ころひまろりのうつり
るまよとるり

天絵てまろり連れ雪れ号

愚考天絵門を源位列後仿湖あり
始りまを列考因歌小出大天絵小五絵の一
節何り白れ臺を本朝後園十洲抄曰多相
院の北面佐茂を清厨憲清羽衣を脱して
閑人と成西新と号くま個人も又志を回

しうしてお後々西住と云。既よ東よ西
のむとを江國天龍川よなりてをを武士
のまゝなる船よ寄寄。船中人多くして船く
はらうらむとす。時よ武士は素門下りて退屈
しと突をうて一筆をうて西住を打き、既よ血
をうてく西住おしとらみ。傍らるるく優
然として船をうて船連去る。西住をうて甚
哀泣す。西住の云。余塵をを出一よりい來
誠よ茶社の寢よ及よるを知り不慮の禍
をよりの大形あり。物りとも又物そら連一む
物を争らむや世宣しと古郷よ為りしと
西住止るをる。西よ東よおふれ。此は白を
只く堪忍を大切をよりの。意氣ありしと又
十六夜日記よの云。天龍のわたりしと云。船よ

のりよ西行の昔もわりのわりの心分そ
里人のわたりしと云。 橋 井 兼
愚考七文字を例の。龍の河よりしと云。此は
温庭筠の詩の一聯。鶯聲茅店月。人跡板橋
霜。又新の歌集よけさるる。人よりのよ
ぬ。此見ええと云ふ。ふとる。さ。表の板橋より
詩の縁よ。此はのよ。也
芝山曰。因。話。旧。拾。遺。不。恒。沙。辺。論。旧。を。方
明。一。宵。お。對。無。余。事。燒。竹。烹。茶。記。我。曾
き。ゆ。り。時。を。冰。う。消。て。く。よ。よ。こ
師。尹。曰。成。後。考。曰。智。易。尽。者。若。冰。山。有。く。よ。也
ち。り。花。よ。よ。よ。よ。さ。加。多。り。興。れ。院
愚考。花。花。為。葉。多。声。聞。縁。是。の。便。と。云

母々曰思爾齧指と云く孔子曰曾參之孝
精感万里と云は故事を名て旧里の人小云
を以て強書多し所建と云く小指を以て心
て之を治らん寢ふ源氏本指の女の指板を
くりて一を此指を成就せり常本の巻よなる
改るる人本指の女々如入りりて小指をく
中つるをりりその指を本指の爲紫に被り
るれ表を修りくりりめ之指をくりりて
改るるをりりて何の事くくくくくくく
高きいしくやるるきくくくくくくく
水一巻入本指の女と指をくくくく二人の
中より注すりり大よ非くありくくくく
一巻常本の巻をくくくくくくくくくく
爲紫くくくくくくくくくくくく

愚考鏡舎建 寺を後源系院 建長
五年北条時頼 建之完山を蜀乃隆大
光福所と謚号寸 禅宗るり法兼法敷曰
掃地之五徳といふ多 自除心垢亦除地
垢去 憍慢 酒 伏心 長功 徳をりり 庭掃の
奴僕と成らんと 俗塵をりり 掃くを心と云
らるるめいりり 祖師の句よ 庭掃て出んや
門よりら 柳をりり 又矣こをりり 布籠の形を
我人の所より 自力の境界をりり 掃くを心と云
我古池系水鏡の 法を解寸 又今寺
毎

是れ世より心あり人れ 妻氣なり
愚考 強姑の所より 却嫌 脂粉 強款 色 又
東坡の詩より 素面 常嫌 粉鏡 洗粧 不退

ふみとて云智て女よ志を智るるも又をりーの
らんや

さくげめー蝶の垣根を荒らるる

瑞川百そむりー蝶の垣根を荒らるる
はるるありー正のすそ連の糸ーての付て

妻形ーと云ふやうなりー女布花

愚考白氏長安集よ移根易地莫惟悴野外
庭第一持息少府と無妻春寂寞花開將
雨當夫人乞多薔薇の款之夫を女布花
よ智て家直のなりーと修するなりー

志の形ーつ藩よ思のほるるなりー

元弘曰拾遺集よくとして宿の妻戸を
よ智て人よ志息のらるるなりー水鏡の
を藩のらるるなりー

松花中志らるる花のよめりー

愚考慈法和尚我意をねを時函の染りて
去暮らるるよ思やふくこ旅の嫁入る
依智の働
ちる花を南無阿彌陀仏とゆへるなり

ま角雅洪集よ曰唯一の祇園ーては境はあら
あれありー是時一時の感偶るるむと云く
一書よ
守武の辞せを越方よありーゆくす急も祇園
山峯の松花ー辞せとすりるる氣の遣るなり

寒松曰守武も天文十八年八月の卒去るなり
花のらるる某亦おの短尺よ菩提山よてと
詞書ありー愚考撰志の辞せとて書入

しるる鹿おるなりとていとも教て謬とはいれ
ありー此るありー辞せの意味るるなりー
謬とありーへる事吃とている辞せの意味あり

声聞歌聲を花苑為養を因と守ちり花
を唱へて世を悟り強陀の名号を唱へて
やう歌とて未だの密を見え傳り解り
此のよし梵音お通の玄旨を合み彼と
是といひ辭世とて教すし亦る多れを祖
も後神よりと思ひて序文をハ書り
多し菩提山とあるは此のよし感すし亦
あり或絶よ曰菩提所求之佛果也との
りの意味をさす只一誰よ徳とすり
の眼を借り海月よひと

笑つらいつ際るきけり此畠

初柳曰親氏要覽曰生滅輪回曰世を迅速を
老幼不定の養よえ之の意を則入回不定
をさめ守る心

南無や空を有明の心とす

愚考悲華經曰佛言南無決定法佛世
尊名号音声と云く瑠璃代辭曰親氏
祢佛菩薩名号皆冠南無二字と云く源平
盛衰記云重衝卿の害をりり時時多し西
よ向て鳴やりの多しハれりるり合
時きけりうりきり西へゆくる被る思ひ
合をいひし

橋のりあり教見ぬほりりあり

愚考日本紀垂仁天皇九年田原間ちり余
て世世國よきて橋を求めり十九年皇
崇徳元年三月後朝台意をりり又奇
せんしよりの多しをりり橋の意をりり
しの人ゆの神の意をすり

を予もきしれりあまうけぬ知の音や西上人の
古歌を九るの一——愚考標如經曰涅槃不
死不生之說也一切修持所歸依也又法華
會上金口親宣曰為度眾生故方便現涅槃
廣如壽量果又後ハ言傳曰昔優填初刻
梅檀亦波初始漆金質皆現寫真容圖
妙相と云

と云はきつりと有明辨りさくららふ

標山曰双林寺中ハ西初標といふ有花の事
ありて云死むまきさくらを月といふ款を
云合めしつりゆりあり

連翻やまを日と云はれり

愚考是又やりの二重切りて教教之日あり
傳授の一つは西初法所を建久四年二月

十五日寂号円位儀最太秀瑠の後胤に於て
かしくをさるみの集の傳るよふありと云

本履らく僧も有りたりるの花

一書ハ此白る初流りてあるに法少納えりあり
傳るありと云

初流を藤てましく花の寺

愚考三井寺の吟ありと荒山と云はる
山此りて寺と云はる云井寺之撰集抄云山
と寺と申要きしる此寺て山のあり寺焼
傳りしとありる是之源氏ハ藤をてりて
をえりてしる此初を摘て立入るあり

花ハ酒僧とも徒心墮者

一書ハ後等日輪寺の僧と連歌のり
とらふ對興してと能書あり陶淵明廬山

受ありし方寸 龍女智積 善薩 志舎利 弟ふ
諺りて曰く 宝珠を奪り 世を納交し ありて
疾しや否や 善一て曰く 甚疾し 女の曰く 汝の神力を
りて 我佛小るく みるを 親をよ 又是よりす
迷ぬる 心 當時の 龍女 忽然の 言ふ
度して 男子と 成て 善薩の 行を 具し 則
南方 五垢 世界 未行 宝蓮 花より 産して 心
是く 三十二相 八十四種 好有りて 善く 十方の
一切 衆生の 爲す 妙法を 演説す なるを 見ると 云く
自ら 意を 出さる 有り

古寺や 伝り さま 鏡の 莖 州

愚考 古寺と 云く 三井寺 云く 三井寺 云く 天智
天皇 天武天皇 持統天皇 三天子の 産湯の水
を 汲み 汲み 清井寺 云く といふ 俗に ありて 云

智徳 大師 改て 三井寺 云く 文字を 改むと
云く 阿山を 教待和尚 建立す 長等山を 改
寺といふ ありて 阿山の 山嶽と 云ふ ありて 是は
山号と 讀む 儀 後太秀 郷 龍宮 塚より 傳り 阿の
十宝の 一ツあり 此 龍を 天皇 祇園 精舎の 良の 角
より 阿あり 蒲宇より 但 樂経の 文を 寫し 名
讀む あり 文永の 發動より 山後 あり あり 歩 彼より
是を 声を出さ あり 云く

謹佛の日よ せし あり 麻子 乃

愚考 謹佛の日よ 日本 後紀曰く 仁明天皇 兼和
年中 傳灯 法師 始て 行ふと 云く 麻子ハ 孔子
家語曰く 鹿を 六ヶ月 ありて せらると 云く

れく あり あり あり あり あり あり

師 尹曰く 五雜俎曰く 七月中 元日 謂く 孟 蒙 孟 目

連因母陷餓鬼獄中故設此功德令法餓
鬼一切得食也

おろけの火をとりの虫れうろけさよ
愚考お掛切菴益焼鏡あり

魂より作りおろけの酒を多向する

愚考孟業益経曰七月十五日具設百味百菓著益
中供佛之船より百味百菓を多れん横合せ
する酒を多向するあり一孟業益を日本
紀曰新明天皇三年秋七月十五日須弥山北形を
龍寺の寺北西の愚よ造りて新ひありと云々

魂より作り道より作りおろけの酒を多向する

愚考りの龍寺の西の愚の辺のたよりあり一
りの人買付の系物ありとて水鏡と
勢とを喰ひて系物と志を感じて杖と

厚をくらうる

厚くはぬ心佛よりするとぬそ

愚考買付の系物とて年中十二月より不溜
多純雲雀杜鰲水鏡精鬱厚勢鬱千水多之
十二月花多とて又十二月花ありとて此下を心
仏より習はぬとていふを經の名は忘れり西城小比
丘阿り群下の龍入をくらうる我食よ充一と
則地よ落つ佛の曰是厚王よりくらうる一と云々
則りて厚をくらうる

燕より寺に報つてうて

一考よ難波の街より入目をまねきうて
えいこの曲より入り入目をまねきうて
よ今の本報より波より入り入目をまねきうて
愚考報より入り入目の初斗より入り入目をまねきうて

詮らるる一夫木集小人すよめて薩も言を
古寺一狸のみちを報うちる連狸のみ一報を
うらするを狸の版報といひあま連とこをす
ときれをりてうらうてと下知一うを
寺の身形ころうう花とりし相をふそまうり
そく心報を則大報るりううりといし相を
りて帰燕の秋まともちり名人の手陰を又
格別るりの之當時の人の別致とて好む又を
持の子よ木縁をうらる法行

愚考托鉢のりる食をよりのる連と末世の今
み至りて縁托鉢るるをすりもうけりうらそのら
く一と一白の主ともるまうり右よ湯杖を
入鉢を拵七家限うて食をよる比丘の法律
りして持扱といふこ鉢よ七粒りり木鉄金銀銅

瓦甕るり又持中の飯を五つよ分てこ一つを
路行の飢人よ施しこ一つを水中の底せよ
施しこ一つを陸地の底せよ施しこ一つを
七世の父母及縁鬼神生よ施しこ一つを
法う食すこ故釈言曰日食上分をこえて
曠野鬼神の分とこ或る河利益母キレホの食
とこ或る魂鬼神の料よ流つ善く法鬼よ及よ
り故よ散飯と号く又律の法よ其数七粒よ限り
又生飯三飯三把とも書るり木のこ沢あり
をよよとこの涙やあふおあふ

愚考強倉の安國福るる日蓮上人曰嘉の未
すり文應の初あて四ヶ毎の間岩窟よの意りて
安國福を製佐しあふ故うりて号りて
雪製やうり二玉の行腕

愚考二王を左々 蜜迹 金剛 右々 那羅延と
号す 本地大日如来 佛法應護の爲に云々して 阿云の
二口明塞と云く 旨を以て云く

俗人の言をて 云ふやれりせし 雲佛

愚考 新撰集入 丈六 此仏を雲よて 俗に
て 供養す 瞻西上人いひ 一の 鶴の 林の 丹いき
うと 思ひい ともそ 阿を 連るり 俗に 此 竹を 云
まらるるなり

予 親の する せわ 一の 之れ

一書より 予 親を 搦氏 相列の 刺史 敏貞の子 有り
初 三舟 ちり 在 後 入 津の 玉 遊 遊山 入 俗に 呼ぶ
俗に 入 出 して 自ら する 夫よ 成り 俗人 を 爲す 性
羨 吹り 一々 嘆り 色面 する 一 俗人 微笑 を 含む
俗に 送像 を する 俗に 笑ひ 俗に 俗に 愚考 津の 玉

田中 金龍 寺の 岡山 阿 周 梨 位入 叙す その 父
予 親 考 入 して 授け 不 ぬ 子 有り 故 予 親と
号す と 云く 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ
俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ
俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ 俗に 呼ぶ

古宮や 雲 あり あり 獅子 改

愚考 左傳 正義 曰 在天曰神 在地曰祇 日本紀
曰 天神 地祇 阿 乃 力 云々 云々 云々 云々 云々 云々
曰 日行 五百里 以 虎 豹 爲 糧 又 曰 野子 者 畜 獸
中之 王也 故 法 佛 薩 摩 乘 之 智 度 海 曰 四 足 獸
之中 獨 有 五 爪 而 伏 一 切 者 似 虎 正 黃 鬚 尾
短 毛 太 如 牙 云々

月代 寺 名 あり あり あり あり あり あり あり あり

愚考 寺 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

入乃とありてハ隱倉以糸よりる事いせしむる物
やらしん也

後言るる人のうしるの極也

愚考名物六帖云朱子語類上漢祭何用
沛就待了皆以木為之已是紙錢之漸と
云く亦言を獻ふ代りことといふ

彼麻一度より流すは後より

愚考五雜俎曰曰呵之相禪皆相生者也
而獨反禪於杖以火熯金所畏也故謂
之伏彼去索身也廣句曰除災求福謂之
彼亦篇を志つる處りし示篇有りといふ
以彼を世談同書曰天武天皇白鳳三年六月
晦日大被朱雀門より集りて彼の弔式あり
或々又名然の被といふ

此月の夷名出らふあり

愚考愚比須を奉代主命よりて大國主命の
以するり大國主より大黒有り神乃名目敷
聚鈔より曰主の多敬す一きりてをせ知す
の奉代主より其宣るるる毎家此父子の
尊像を合せ奉りて敬おするる吾國家の
法非事を待りの何そ此亦より心也
有存る幾代より有りぬき

愚考津守國基の歌年経連と老おせん
して和歌の備より幾代よりありぬ玉津高姫此
歌の初を記する有りぬむといひけり切
るるりといふ

君の代やみりくする事い玉撲

愚考隱倉右大臣子代横伊豆の清山の玉

換八百巻代さいつらるるく〜とりあは〜
色うららねいなりく〜あらし〜玉換とりれを寄
るる事と虚ふ修りなり

先 花を 心の 花を ありり

一書よ王仁の種は津よさくや赤の花を赤の
の歌をえあひ〜とあり

曠野集員外

員外のりる意ていり〜無りよ〜あり世といよ
集の亦る道ハあり東田町の麓ありて東田
明を赤敷山之敷山をいりとり入る道あり
文選天台山の紙よ曰登陸則有曰天台

又丈山の霞袋集よ曰山上一輪月を
則比叡あり曰記曰山之上有自然石窓曰
面透明故曰曰作川田表六を一書よ永井
家の信下と昌俊と号す山城必新の里よ
限拙す〜と昌俊と集系三十六歌仙の一人
ありて吾輩山花を信比の朝あり〜とあり
〜のり集の信雲とよあり〜吾輩山の名歌
ありと云〜此本歌を吾家郷の小倉山志く
〜の歌の抄あり〜きののよ〜うすき〜吾輩のの
ら美ふとり〜とえてよ〜と云〜古歌古白あり
〜と云〜とあり〜をとり〜二巻の糟粕あり
は焼きて大切ありと云〜
吾 喰〜唇とたしとあま〜
一書よあり時ありのすきあり〜

兩回蒼鷹の四葉兩斤回又曰雄ハ兄鷹といふ
唯鷹を才鷹といふ又廣忘曰一葉黃鷹二葉
松鷹三葉青鷹

まろり 松のむきり なるの 端

愚考名物六帖云燕回録曰戴石屏之詩小
麥麴粥克食松明夜燭燈是之涼山之
志松心膏油物如疏山西人多以代燭頗不
畏風箱根或を鞍する口をくもて篠井を
未祿て賣るといふ

于白いとまふ 小山此 寺

愚考若校口とて大系子白の無形有
僧主多細川玄首法衣之法眼紹巴の宗匠
よて懐紙を鞍する寺の付おとまり時ふ天正
の辰とや秋ふ山山れ焼く橋や嘆はらむ朝

る夕るふ花のまのしして

杖をふかしく 盗人の妻

一書ふ樂天の詩ふ大体曰心總若乾中斷
腸是秋天白きまをりらりこ

柏木の脚氣の以のつくりと

成美曰涼氏有菜下まの以不ひよりまい
わはらむゆりらくひやうといふまの亦ま
とらひししうまひとらひもゆり氏和名抄
脚氣一名脚痛俗に阿之乃介

うまひしとまふ不彼の万依

成美曰文徳編年集成曰言形山もて秀次
の扈後不被万依十八葉人しとともし自害
可し文祿三年七月十五日

を淡や浪ふ 志めさうい 樹 亥

愚考志ぬを標するの又帛と水面よせす寸又切
るの是より是よりを流るしと漢意の指分く
を流る沖よりを流る沖より至るく多分入込
よすふとるるるりとりや焼帛強帛の敷とハ
又格別るり裁めのとりよそり

杖燈よ女くふ下の 徒 男

一書よ今昔物語よ曰流儀燈の意よ紙出て
往來の人をるるや守より一裁光物良信
めせよ直るる武等よ修るる連るるハ女車よ
せよてせり一ありてより果して盜賊とるる夜
服を剥ぎむと立よりるるをよ雄昂時よ紙
のよ紙をる捕しとと

袖そ 流るる 流儀 の 法 流

愚考元亨 歌書曰流儀法流与元明天皇の御

宇秋る昌の因基流初の衣の袖よ虚空流
菩薩の流るるいり何らとる連るるよとるその袖を切
てその後安置す

美しき 袂 うちきり 云 此 水

一書よ古詩よ云備魚浮春水

柳のうらめりあきりり の 卯

愚考端埤林の未よいつり本字のうらめりり
つめて子をうみけりて標埤と書ていふるの
子のうきりりゆすとりよその形のあ中一とる
よや伯父のふりり又ちいのふりりるるり
よ曰五月の美端埤の子化す則七十二候の流乳
るり孔子家語曰貴八月月りて化すと云九月
より四月と云上八月月と

夕暮 流るるの 流 てるるる

愚考なるを服との二をを思ふ人とい雑
姐曰胡焉不出市夕霞走千里夕霞を日
る事ハ漆物も先ず上りつるをてて師の人
考ひきききき勝角力とて

愚考角力孔おろりを神代ももありしを
人の代とるりて多垂仁天皇秋七月當麻理速
を智多屋孫の投殺しを亦其を悉く室孫
よありしと日本紀より見ゆ一説は考を勝方一
とは世とりは是う非可その起りをとる人
うふも又おひるもむとてき出り

火鼠の皮の夜をくはね来て
涙見せしとくち笑ひはく
言并よりの踏らつてそ落よる

法注皆曰火鼠の皮夜を火浣布之竹葉物
くくありくや姫の古よりありと 愚考姫の
二白を竹葉りの語いとらりちのゆ子のゆつら
り身をもけしはくも玉の枝ををくししてさ
らよりつらさうありくくや姫玉の枝をうりす
としてやれことくはてせばはれハ云れ葉を
くせむる玉の枝のそ有る中の一白を在大鼠
ゆつのみむらしけりなりひふやもあ皮
あふもあふりてりいすてきふあそもあふりくや
眼皮ふらもを焼て名跡るくゆと志りきえ
皮衣たひひの糸もあてえありしを後の二白を
いそのうむの中納言子安貝とらとてあて
腰をす折ちりたるけきてけいもあく有る
りのを焼くしてえぬら命をすらひやばあぬ

いづく屋敷に引くを待て彼をさらしゆくは佐の
江のやうにうらみおしとまきくまやうのうらみの山よ
丘をいとも行くとくおぼしや火洗布を唐の火剣ふ
栖む嵐あり銀巴り玄山の長さ三十里火嵐
長さ云尺此をいめて織とるなり火嵐韻序入火
不焚毛長丈許可布亦謂火洗布是也
一書よる上る生敷お越るなり是らの後の糸も
あつるなりと云く言よめてるく言みこいり
よみちこまむ

何よりお打志めわさるる花の敷
月のお不ろや花を井孔表
灯よ手をねおひはくはりの地
愚考獲夜ふ飛る井の若か茂一語多ひ
又威儀師の盗て連るるを大將の目よと万

ことくうへいあひて堀川の花を井のぬい
はまきを身つたぬいぬいしては君奪まを
おれとらきはくはく燭灯火してさくを
ぬを二つめりて治定寸書しくる本文を見
る一書に花を井若の二何をいふ引せ
らまて入水の侍ありとするるあつる
おぼし向るく四つりのありむ

隆達も入歯又奪の志はらる
成美曰隆達を日蓮僧の還俗あり小くこの
上より隆達と云又投書とるり山泉列塚
の系伝あり
引於し車を批把のうらまを
あつるなり人ぬらうら
一書よは二つめりか茂の車あつるひの侍

愚考源氏葵の巻六糸川息所と引入の
の北の方と葵の上と車立亦よ仕下ともの
あらそひありていとさうりき鏡阿のいさ
の略し早琵琶の學木を書換るり

六位よありし意のうハ章也

代よあるをそと安しと交むひて

殊一巻よのりハ一

愚考伊勢の後曰業平朝長いさの由よ
のりの使よ下りておまよあるをそ子いさ
より君之の造ありよありいあささうころあ
よつり多りとあ建ハ道ありといよ若向の
出いれえまをさうりよして六位の附あり
母よの仁明帝の皇女怡子内親王は時
業平朝長六位よしてその後貞觀四年九

阿ら五十七

位よ叙すありさうころあよつりとあり
まののりりの撻振るり実をそ時懐肚有
て多りそさゆいよ意のうハ章とよいさ
りのこ代よありの附るそのお安しころを
言階師尚とりよ秋宮殿の言階ある連ハ
今よ糸ま叶えりとするり以上関類抄の畧
文ありとて殊一巻よを令百北るり京あり伊
勢ハ三十六日往來七日よりして藤和之繼一
言を藤甲の用さうりて雅よ繼うとハ
言階造と無名よ代よとすり多伊勢より外
あり風雅の心をたよ一系に心を思ひて五歳
七道をたれりめくらすうゆいよ百北るり
のりを定めしり表を信淡平法の言と
見を内心の大腹中るり殊よめ正るり

詔の宿きのいふは依濃をいハ甲斐

愚考 詔を爾雅曰小馬之事文後集曰馬二
歳曰詔又何やらいふの二歳を詔といふと
書りのそいふ季お治曰十三日といふ甲斐
の詔途十五日の依濃をいふ今宵九月いふ
れいといふ探りあめいといふの依の
詔引きて集りあめいと云々公事根元曰依濃
の依國をいふありと云々ハとて十六日いふ
うはさきいふあり十七日甲斐詔途と云々
と云々ハと云目いふあるの十七日甲斐附ハ
公事根元いふありといふあり

林の阿々いふ昔淨瑠璃

愚考 抄亭西持の巻物入抄淨瑠璃始りて

阿ら五十九

十余年 滝野沢角の両横校平家いふハ
く琵琶の妙をいふより淨瑠璃物語と
いふ双紙をいふと云々して業師十二神を
いふといふ十二位といふをいふと云々
を云々弦いふと云々といふと云々
ひらきと云々いふと云々の此先と云々
地紙と云々いふと云々の拍子を云々
又初めと云々いふと云々の此後と云々
也云々之身といふと云々の帝
觀覽交しと云々の淨瑠璃大夫と云々
いふと云々の安口判友 弓弦 澄瑠 大井田
五輪碎 是をいふと云々の可い云々徳元
辛卯年 初林吉日行本筑後掾友系傳
花押阿ら是との畧文あり 詔の宿きの事

三強をまわくして只身かろし一のちり降る
ありし

月よ柄をさしきりてふよきと云ふ

風俗文選よ云荆口山邊家澄り月よ柄ハのり
たりて注あり味嗜はけりゆふら建たよきと
ありぬ 愚考許六も許六あり宗澄は師の
白をいづく心好しりや意味深きうしてせり
ら建ハ幾人の眼起りゆふら建たよきと云ふ
のちめゆく月よ柄をさしきりてふよきと云ふ
ゆふり夫木集よ及の夜をひりすしりく
すむ月を我もの影よふとてひりすよきと云ふ
影を網をさしきりてふよきと云ふしりて夫
木集の影を柄をさしきりてふよきと云ふ
發しきりてふよきと云ふ後楯と夫木をいふ

何ら五十九

ほろろしきり活斗之舞よのり注よ曰維北有斗
西栖之榻星よと柄のありのりを何そ月よ
柄をさしきりしりて白きあり手きりて古人の
胸中をさしきりるの

夫木柱はうへたててよりりり
使のりよふ返りす

愚考夫木柱をゆりりあつそハよみあり
さしきりハ使のりゆりりそ六帖我妹子の来
てるよりりりよきと云ふしりて
ゆりりとおのハさしきりてはるを意あり
ありし

何れはととととと猫の子を撰ぶと云ふ
とととととととととととととととと

愚考事林廣記曰試猫從頭捻看若尾和

あつちれ月るりのさそて又一白を吟し味あて
みえよよくりしきげえうらみすやとハワ
くく古歌よひひすした我名をとるげえね
のまきさくこうりしとれみ鳴わゆるうま後神よ
おやまの神てま小きれあうるまきとまよく
しきげえあふひすや喧又罵又嘈ことま
書て舞の乱まぐる形こ神居のるうるまきハ
めはくくくたれひよりしまをいりてきげえ
うりしものみあくとま成かところしき
舞ことりみまるりのカマヒスエカラヒスエラ
とてと通まことオ一よよりしきげえうら
すやまてま一白まえんよくりしきげえうら
まらりしとまいりてまあつちれ神居
るまきハくくくまらるるまき

瓢箪の大ききと五石はあつちりこ
成美曰庄子よ我種之成而實大五石よま
利をとほるまきまらりれえんまらり

ゆりよまらるるまきまらり人
あつちりまらるるまきまらり地

愚考のまらるるまきまらり地
まらるるまきまらり地
人のあつちれまらり地
本のまらるるまきまらり地
すりまらるるまきまらり地
のまらるるまきまらり地
らまらるるまきまらり地
地と三白よ許由り伊をとる守り古詩曰長
安古来名利地空手無金行路難

成美曰白氏文集帝都名利場終時必安
居又終夜清涼系前笑歎不知疲去安名利
地此真幾人知

きいぬしやあまのうかそくあてやりた
空引あまのうかそくのうかそく

まもはるくはあまのうかそくあてやりた

一書にうはをわたりてりふはあまのうかそくあてやりた

しあひぬ 愚考源氏集の巻よ紫の上十回紫
は君をよ上よあまのうかそくあてやりた

とあまのうかそくあてやりた

又そのうかそくあてやりた

まもはるくはあまのうかそくあてやりた

人去ていずいひあまのうかそくあてやりた

一本よ法衣の白ひしすのあまのうかそくあてやりた

あまのうかそくあてやりた

あまのうかそくあてやりた

あまのうかそくあてやりた

愚考源氏集の巻よ紫の上十回紫

あまのうかそくあてやりた

あまのうかそくあてやりた

駢青雲致虫白雲致喪黑雲多赤
雲主有火是二有ととも必死の姿と歎又
夕歌の上をばつきて之の手しりし時乃歌
山の端の心を忘らして初月のうらみ北空よ
てかけやをさるる心此歌うをさるる一書の
赤表りや河原院よりむるりくするりよ
又次の鞍又居賦の白も夕歌の上をさるる
のをさるるの侍りして是をさるる侍り
てさるる夕歌の上の侍り白さるる侍りの二
三句の注釈法注よいりし初連しともみる憶
説りして益るるまは紙墨の費んといひて
畧し早さるる又あやうくといひ初連いりし
義理有といひとも皆此のひあやうさるる
爰しそをばつくとといひ初連源氏竹川の巻末

いしういあやうく心をさるる侍り
さるるいしういあやうく心をさるる侍り
あやうくいしういあやうく心をさるる侍り
強といひあやうく我信濃よりを抄わらくと
いひとらるるいしうい
愚考天子上林よ出て辱るる射あは是よ帛
書あり漢書蘇武傳の畧るるり又古今集
よ秋風よよ初序の序その中ゆるる流玉はさ
をうけてまはららむ
恨さるる洞あはいよいよありて
静は前よ静をすむり
一書曰静は前よ静をすむり
ゆく流ををばつくとといひ初連いりし

此書をまうす何れに於て其の位よりの事を知
舞ふ名をきく女有まはして此亦なきあり
た舞の歌ふ名つや志の志はのをこし
くう一しむしをいふあるすよし
是義絶を志く人の志よりして公より
あり人の志の許六の徳倉の斌あり
舞臺を静の舞のといふあり曰吉
舞を好みありといふ別あり

空蟬の離魂の故にこれをき

成美曰本草細目人參條下人有人卧則覺方
介有身一振無別但不知蓋人卧則魂歸于
所此由肝虛邪襲魂不歸舍病名離魂
故多いし此子の略してを記すことあり
あり愚業カケル病を一人をいふ一人ハ

あり六十一

人兩人とも小行往に渡野修ふその志候
を分るるありといふ候とあり

けありりあり 金二万兩
いとをきく子を他人とも名付あり

一書よ京室所よ京甫といふありの親子れ
るきくをえ陽り二人の男子を勘當して
家紋家義を賣代り二万兩此金を懐
りて生涯矣者の困窮ををすけり
あり此侍もやありむを世崎人傳ふ出あり
やけとありしてあり

意味堂曰楚國よ一人の孝子あり或時何や
ありて母の歎を火入屋くその罪を悔
て自分と郡主一許一歩ありその母れい
やう是を我子としてあり

切より

養をりりしと之附きぬらり

そめいらの不を浅黄よ林のくま

一書よ獲迷廬山を須弥山にあり西域記

曰在大海中摠金輪上日月所回迫於北

黄よ南をまなく東白西吳藍よそめいらの

山をまをそめいらの富士と引真し

花とせしまらり 子れ一解

一書よ子花をりて花より了ら花の正花

とるをりるなり 饗政をりれしと後よ色みり

愚考事物紀系曰法葛亮略製之為神

供又何やら入臨儀家の傳入建仁寺の僧

龍山禪師元よ入て林淨因といりのを

亦よよ寸此淨因より饗政を製す龍山

後朝の時淨因も来朝し後よ氏を壇

と改め南都入住者すと云々 西王母 東方朔も同よるなり

一書よ平家物語に曰滝口より西王母と

いひし人も昔よありて今よるなり 東方朔

とやししものも多をのり守て同よるなり

やや 饗政の言れみり

愚考曲礼曰饗政よりいしと花ををを

るまら虚よ虚の對るなり ひるなりりて 伊勢の八歌

一書よ後のひるるのりよいしとをり

愚考後のひるるを九月朝白く伊勢よ豆雛

といしものありて今よるなり 見事の歌の

と守るなり 一歌宮の雛儲八月朝白くあり

説所の人形を垂仁天皇八年形する人宿孫
始て遠くありてハ時代もあるなり一子八節を
俗山田の面の花といふ此日西辰を夜山山
田の實といふ一子

満月よ不改 橋をたぬめもや

愚考 雛を世よのてを當時三月はりのるる
を仔細もてハ是雛をまじと不改の歌とい
とすの様とてハまきぬく不改も詠ふといふ
美言あり一此附 雛日よ満月の様とを字えぬ
やうありそこの名人の云あり一して則ハ歌よ
居て満月を未来の樂をたのむ斗りて詠
めたりやと上よ入依りまらるのて一説よ満月よ
橋をたぬとてハまらるの補ひるるといふ爰
よてハまらるの補ひるるといふ爰

あら六十八

このあは花火 餅花と云苑るり必補ふといふ法
をたぬく心此附よ月をのこのまじぬ沢あり
前の月二つありて短るるりよてまら月
産るのまじハまそ出ハはま

念者法師をたぬくの林うを

夕まをれ又うらめしき孤子夜恋

愚考不改様といふよ法けて念者の意
を附するも又たのりらき見えぬるり平坐の
恋るのまじハ不改といふ文字よありてはぬあそ
又うらめしきと多又傍の夕まをてまらとといふ
をといふまらるる

むしらま一ま喚 續 ねらる

一書よ世るもて危張國よい片まの漢よ
よせくらのま基あやありて是をまら礼者乃

後よ庭を交てその家の子後たあそびて
吹すをふらして喚續してはとわうり伴
ふ暗然といはくもて家中独れ無れとも
にその文をよむはくもる愚素花の美よ
あさはき眩を年既もろ研はくもりきり
庭を一手の初あてもあうり一尾張も喚續
と後呼續よ改め又呼続よ改あり今を宵
月の里といひ祖翁星添れ獨書に宵月ハ
夜明てくると日よる則是るりと吟海北
子代倉某よりそ後玉刻和漢三才景法よ
か見ゆ

新酒を人のせぬ安き
林うそまゝいほも湯きり

愚考博物志曰人中酒不解治之以此湯自漬

則愈湯亦依酒氣味也又本草紙曰酒文
飲二首の夜行の飲司りてやほせくろよ
乙めり酒を酔是酔やまそひいそりは浴
の飲ひの後ほらやうそまゝ湯あふそ
みくはかろくよひてを雪云安
う盛よい新酒をそあまそまハ在る一接
扱よ云は後多酒ゆへそそり香き一
そより上るそそりて酔よ一してそ
湯よ入るりきりそひ林そく風てそ
引てそそりめと一るの十日文字よ其深
の味のあるり元悪の及くあふれ飲人
る酔よ博識只その依者の分量を行是
て解すあり一才三書を引らる守り酔
う一形容又あつてそそりれそら

介面系此字わげよゆく
愚考此病体として世るよ沙汰するを
非るり只能乞の酒入酔うよ酒さす
の業をとるよゆくよ介郎の縁袋糸のと
やまうた実福と和衣色を抄よ云介面を脊
面よ介面とも書て家の後よ是又孝主の
挨拶也

疱瘡教の透と何ふと毒の白き

愚考痘を古より冷曰聖武天皇天平年
中筑紫孔人新羅よ渡海して漂泊のち
うらう流りある時よ泰院和尚法を終し
て漸息災るりよ云く此病の甚しき醍醐帝
後光の帝痘瘡よて崩御ありよ又麻疹
よ万壽二年始てんやるとるり詳よハ懐

妊のりのを治するり何よをんといつて

明日を髪そり 膏此月うけ
志ら此中のむきて流るり女也

愚考是もお産の債るりといふとも数多
くして何とも定めりよ一嵐雪り医師のる
よて死去の姿に附してゆく何とも定ら
ぬるり余れお産の債るりいふも有るま
とも源氏を何の債のせりのるりを何の
債と皆三万の債をいそまらるる定まら
此二万の債源氏最毒の債任るりのるり
の中納言継娘の債大なお産の武蔵の債
るるらうこきつて髪よてを只平生のるり
をるりよそりよむ
よ入こきるとる何をりよらむ

宗因やらのるよ人よ毛の三筋をうりて
呼子る其角うるやらん猿をうりて狙す
て北けよのうらる彼その論語を差する

神電やさし〜のあつる相の本よ

五味堂曰古詩よ曰三寸白雲降指相云々

あらら〜し〜も捷ろ 萩

一書に五名抄曰陸奥守為伴任果てのちり
り時玄機抄の萩をちりても捷十二合よ入
指してのちりちり八人ありけりて京一入
ちり日ち二桑大流よ是をえ知して人多
くあらまより車る〜もあら〜も〜りちり
るを押合よ月とりりよ後り後のるを必
司の人足る〜うげらり〜り

忘のしりのいよあはれをいよるま

愚者乃大ねりのうりよ既破のゆ時としのや
以息不業の以曹子の前やうりを物狂〜
手く女のこのけありま〜りを帝あや〜みと
あめせせも〜と〜のよぬいよ〜りちり
公忠朝長あ〜り心のうらるをえ〜ねと
泣を〜るあそ〜り〜りちり

柳らら〜と 例一の 蓬 及

一書よ蓬乃多形の下之尺、通りこ探干のめり
る〜のりるも云又ハ王公の御者の尺筋よ蓬を
交或る布を〜或る友袖を〜すら皆蓬を
の傍を〜は守はるる幕下傳ひの蓬を
寂〜き林を女ま話 ちり
愚考私よ配するを女まと云 燈を調一媒

阿のを夫婦とりし

書とこれらうり味とえすすあり

一書よくらうり味と伴契と河内の場合あり云

さうし子や正本を引よ讀くあり

一書よとさうしとを核あり正本を判本ありて

上より目の無りしりてとさうしと云此後をむ

子箇々のさうしとさうしのト略 一書よとさうしとさうし

本とさうしとさうしのさうしと傳ありありあり

核と又さうしとさうしと法後ありト略 一書に

延壽武村種と書 此書日本紀私記よ曰福

草和名抄云草枝々相値さく相當也 愚考

さうしとさうしとさうしとさうしとさうしとさうしと

枝とさうしとさうしと核の説を説くけ種

先の瓶物の細炭賣の妻や子とさうしとさうしと

合し核や正本を引よゆく傳之核や
正本を引よ行とさうしとさうしと核あり
引よとさうしとさうしと

阿らうりよとさうしとさうしとさうしと

略とさうしとさうしとさうしと

浦邊よとさうしとさうしとさうしと

愚考おとさうしとさうしとさうしと

を物のりの傳の傳とさうしとさうしと

るさうしとさうしとさうしとさうしと

くさうしの初をさうしとさうしと

その巻のうらさうしとさうしと

めらとさうしとさうしとさうしと

沙のらうしとさうしとさうしと

よせうりとさうしとさうしと

おそく——おす進きせりいふりの心をたのまひ
くし新志のりお見えとやしくとるのし——
さくろく人のり——あやしき海士とるものさき
人たはさるあしとてあつありあありてはさる志
はまのあるものもをさへはりのあつたといとあつ
らこのあつたはさしはりのあつたといとあつた
月のさし——あつたと二つの初をたえて三台とさる
ちりさる守人をさすてよああむむむはし——と
おのそむ人をさすたれしよりをいもあつたつて
てんら——つてつてつてつてつてつてつてつて
をあつたつてつてつてつてつてつてつてつて
らうにありうつてつてつてつてつてつてつて
見りたり——こき、紀伊の北魂を

愚考 和漢三才系、まよ曰紀列名号、新漢

中村長保寺天台宗のつてる後二百八記列
家の意、挽ちりし——て新宣とこれ北魂を、何の
實又十一年薨す南涼院教と号すとま

善志、これ——矣、射て、名、院の陰

愚考、武用弁略よ曰寛文七年、此書、紀列の
大なる家、長五人よ命して予射をるさ——む、亦謂
葛西源太左衛門、葛西屋右衛門、徳田甚太郎、吉田才
左衛門、若橋甚太郎、各九分余、これ通——年八を、ゆり
と云く、是を、し——射り、つ大矢、教、も、ま、あ、つ、は、小矢
教、る、り、大矢、教、る、之、兼、目、の、言、方、より、あ、る、は、言
言、よ、終、る、尾、陽、是、射、勲、た、ま、つ、八、十、筋、射、る、と
云く、傳、よ、曰、是、の、則、本、附、る、り、若、よ、り、あ、つ、よ
附、て、ゆ、く、を、う、し、ら、附、と、云、古、より、物、り、りの
附、よ、心、を、た、ら、し、合、志、す、る、也、

秤よくつかんしれ無

愚考秤を斤兩を二守りの中へ北越してを
斤兩とりよ又ちより社秤略してちきとより
此有極入るれまのけるるに

愚考獲衣よ曰入るのまを獲衣帝れ娘
まよてはく私れ入るるをまの獲衣よ
あらまきをまのらを獲衣の大將よりはく
意をいんをまのれとらひくたりのうく
おのりあつて人よまらうしあひまらるを
おのりあつて人よまらうしあひまらるを
後るよその債をいひすりまらるのそし

尺の寸十四

